



ニュースレター

第54号

NPO法人 日本リハビリテーション看護学会

事務局案内

住 所 〒162-0825
 東京都新宿区神楽坂4-1-1オザワビル2F
 株式会社ワールドプランニング内
 NPO法人日本リハビリテーション看護学会
 事務センター
 電話番号 03(5206)7431 FAX 03(5206)7757
 E-mail jrna@worldpl.jp



ごあいさつ

副理事長 石川 ふみよ (上智大学)

今期、副理事長を拝命することになりました、上智大学の石川です。

臨床現場とのつながりに関していうと、学部生の実習指導、病院から依頼されている看護研究の指導、大学院生の研究のサポートなどに限られており、自分の足がしっかりと地についていない状態で、リハビリテーション看護について言及するのもおこがましいことだと感じています。そのため、本学会において現場の皆さまの実践や考えに触れさせていただき、管見を是正していきたいと思えます。

私がリハビリテーション看護について学び始めたころ、リハビリテーション看護は、「看護一般に共通する概念を含んでいる」「看護のベースである」という考えがあり、「特別なものなのか？」という疑問が生じました。今も、専門分化が進む医療・看護領域には、少なからずリハビリテーションとそれに伴う看護が含まれるので、教科書を作成したり、授業を組み立てたりする際には悩みます。当時、看護教育を受けた後に米国で理学療法士の資格を得た大学院の指導教員(理学療法士の pioneer) から「少なくとも今は、日本の中で特別なものとして認識しても

らう必要がある」と助言を受け、「リハビリテーション看護とは？」ということを考え始めました。その後、国際リハビリテーション看護研究会の活動に携わってきましたが、当初は、現場で行われている看護実践を系統的に組み立てる、他分野の知見をリハビリテーション看護に適用する、海外で実践されている看護実践を紹介するなど、ファシリテーターの役割を果たすことが目的だったように思います。現場の看護が発展し、その役割は終了したということで閉会したわけですが、本学会においても活動の機会を与えられた今、引き続きリハビリテーション看護について考究するとともに、およばずながら職能団体の力を高められるよう努力していきたいと思えます。よろしく願いいたします。





学術大会のご紹介と挨拶

社会医療法人愛仁会 愛仁会リハビリテーション病院 森田 眞由美



この度、NPO 法人日本リハビリテーション看護学会第33回学術大会におきまして、大会長を務めさせていただくこととなりました社会医療法人愛仁会愛仁会リハビリテーション病院の森田でございます。このような大役をいただき身に余る光栄です。

さて、今回の大会テーマは、「もてる力を みつける 支える のばす」です。

2019年末から瞬く間にパンデミックとなった新型コロナウイルス感染症は、未だに終息の目途は立っておりません。今年の7月には、東京では4度目の緊急事態宣言が発令され、第5波への危機感もあいまって、東京2020オリンピック・パラリンピックも、一部ではステイホームオリンピック、無観客での開催となりました。医療現場では通常業務と並行し、感染の脅威と高齢者は重症化による長期入院、廃用症候群の進行がやむなくという状況です。また、予防のためのワクチン接種への協力などCOVID-19対応業務のウエイトは増大しています。そのような中で、看護師は様々な倫理的ジレンマを感じながらも、患者のニーズに応えるべく日々奮闘しています。病気やけがは時間が解決するものではなく、適切な時期に適切なケアを行うことが肝心で、患者のQOLに直結していきます。災害時に平時と差のないケアの提供を行えるようにすることがどれだけ患者にとって有意義なことかを、私も改めて認識した次第です。

この学会に参加いただくことで、患者の復権をどう支えていくのか、新たにどう創造していくのか、また、感染防止の観点からなにかと制約の多い中で、今後どのような看護を展開し患者に寄り添っていきのかを皆様とともに考えていきたいと、著名な講師の方々に講演依頼をお願いしました。今一度、リハ看護の原点に立ち戻り、それぞれの看護や教育の場で新たな一歩を踏み出すきっかけになればと考えております。

当初、本大会も現地開催とオンデマンドを計画しておりましたが、感染状況を鑑みて、オンデマンド約1か月間の配信のみへ変更することとなりました。現地開催でしか味わえない臨場感を得ることができず、非常に残念です。しかしながら、オンデマンドであっても大会を開催できますことを意義深いことと前向きに捉えて準備をすすめております。

今回は、施設単位での参加も可能となっております。どうぞ、沢山の方、施設がご参加いただけますようお願い申し上げます。



悲しみの夜にカピバラが教えてくれた大切なこと

瀧森 古都

ふらっと立ち寄った本屋でたまたま手に取った本が面白く、一気に読み上げた。物語は30年前の出来事から始まる。ある動物園のカピバラ小屋で一人の男の子が保護される。名前を聞いても「おチビちゃん」としか答えない。母親からそう呼ばれて育ったと言う。歳もわからない。軽い知的障害があるようだ。推定5歳のその子は、母親に自分が置き捨てられたとは知らず、再会を待ちわびながら児童養護施設で育つ。

親代わりとなった児童養護施設の園長に「加比原譲二」と名付けられ、やがて大人になる。そして動物園の清掃員とその動物園の隣にある小学校の用務員を務める。生徒からは「カッピー」と慕われながらも、ちょっと変わったおじさんとして時からかわれることもある。人を疑うことをせず、見返りも一切求めないカッピーは、純粋な愛情を生徒、保護者、教師に与える。登場人物一人ひとりが純粋なカッピーと関わることで、人間らしいありのままの心に戻っていくのが感動的で何度も泣けた。

ところが、カッピーは命の危険を感じるほどの「いじめ」の対象になってしまい、殺人事件に巻き込まれていく。どんどん読み進めるうちに、これはサスペンス小説?と錯覚してしまう展開となるが、大人になるほどに忘れてしまう「大切なもの」をもう一度思い出させてくれた一冊である。

自身の幼いころの感情が呼びおこされ、苦しくなったり切なくなったり・・・でも最後には温かい気持ちになる。カッピーは言っている。「幸せは物ではありません。感じることだと思います。美味しいと感じた瞬間とか、風が気持ちいいと感じた瞬間とか、褒めてもらってうれしいと感じた瞬間とか、動物を可愛いと思った瞬間とか、そういう瞬間を「幸せ」って言うんだと思います。」

秋の夜長にぜひ読んでみてはいかがでしょうか? 「幸せ」の感度があがります。

兵庫県立リハビリテーション西播磨病院 柏木 史江



編集委員会からの お知らせ

〔日本リハビリテーション
看護学会誌
投稿論文の締切について〕

投稿論文は随時受け付けますが、4月30日を締切日とし、審査を行います。

ご投稿をお待ち申し上げております。

事務局からのお知らせ

2021年度以降の年会費改定

1. 年会費

正会員（看護職・その他）7,000円（現行4,000円）
正会員（介護職）4,000円（現行価格据え置き）

2. 入会金

これまで入会時に徴収していた入会金1,000円については廃止します。

3. 実施時期

2021年度年会費から（2021年10月1日～）
新入会の方には入会時、会員の方には2021年9月に請求書を送付予定です。



施設紹介

医療法人溪仁会

札幌溪仁会リハビリテーション病院

看護介護部 部長 森河 琴美



当院は、北の街札幌、の中心部にある、回復期に特化した155床を有するリハビリテーション専門病院です。病床は全て回復期リハビリテーション病棟（入院料1）で、入院・外来機能の他に、在宅支援を担う訪問看護、訪問診療、訪問リハビリを有しています。回復期リハビリテーション病棟の病床数では札幌市内では最大で、市内は元より北海道内（25%）、道外在中の患者（4%）に対応しています。

『わたしたちは医療を通じて、ずーっと地域とそこでくらす人を支えます』という病院理念の元、職員367名（看護師94名、介護

福祉士45名、医師15名、セラピスト154名、他）がチーム医療を実践し、今年で5年目を迎えました。

入院患者の約70%は脳血管疾患の患者で、3年前から札幌医科大学病院の脊髄損傷患者の再生医療治療（ステミラック注）後のリハビリテーションを担い、大学と協働しながら患者の社会復帰支援を行っています。

看護介護部の理念は、「地域や社会、患者の期待に応える看護・介護を提供する」とし、希望を見出し思い描く生活に一步近づくことが出来るよう、日常生活活動の自立支援を中心にリハビリケアを実践しています。昨年は、回復期リハビリ看護師院内認定研修制度（愛称 KIC）を整え、9名の看護師が講義や演習で基本的な知識を学び、リハビリケアの実践にとり組みました。特に摂食嚥下機能の改善に導く食支援や、リハビリを意識した動作支援、ICFの考えを元にした退院支援などに力を発揮しています。更に、フォローアップの場を設けながら成長を支援しています。

また、2021年度は、意識障害や廃用症候群の患者に対し、寝たきりにさせない生活行動回復看護（NICD）を学んでいます。看護師の専門性は見失わないよう学びを深めながら、真に患者が中心のチーム医療に取り組んでいきたいと思っています。



編集後記

57年ぶりの東京開催のオリンピック・パラリンピックをTVで観戦し、選手の洗練されたパフォーマンスの美しさと、闘う精神力の強さに感動を覚えました。目指す目標に向かって努力する姿勢は、見ている人々に勇気と感動を与え、パワーも届けてもらいました。コロナ禍で先が見えない困難な状況下にあります。強いパワーを頂いたことに感謝・感謝です。

公益社団法人 宮城県看護協会 熊谷 恒子